

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	島田長人先生ご略歴
別タイトル	Retired Professor Nagato Shimada: Curriculum Vitae
作成者（著者）	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(1). p.7 9.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2022 035
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD31841756



島田長人先生ご略歴

1957年11月17日生

- 1982年3月 東邦大学医学部卒業
- 1982年6月 第73回医師国家試験合格
- 1982年6月 東邦大学医学部附属大森病院にて研修
- 1984年1月 国立がんセンター病院麻酔科にて研修（～1984年6月）
- 1984年7月 東邦大学医学部研究生（外科学第2講座）
- 1988年1月 鴨居病院出向（～1988年12月）
- 1991年7月 東邦大学医学部助手（外科学第2講座）
- 1993年6月 東邦大学医学部附属大森病院救命救急センター（～1994年5月）
- 1994年12月 東邦大学医学部附属大森病院第2外科医局長（～1997年11月）
- 1995年12月 博士（医学）（東邦大学乙第1855号）
- 1997年12月 社団法人日本厚生団長津田厚生総合病院出向（～1998年11月）
- 1999年8月 東邦大学医学部講師（外科学第2講座）
- 2003年6月 東邦大学医学部外科学講座（大森）一般・消化器外科移籍
- 2004年2月 東邦大学医学部総合診療・急病科学講座移籍
- 2005年10月 東邦大学医療センター大森病院総合診療・急病センター助教授（病院）
- 2009年7月 東邦大学医療センター大森病院副院長（～2012年6月）
- 2009年7月 東邦大学医学部附属東邦大学保育園園長（～2012年6月）
- 2009年7月 東邦大学医療センター大森病院研修プログラムプログラム責任者

2012年7月 東邦大学医療センター大森病院院長補佐（～2021年6月）
2012年7月 東邦大学医療センター大森病院教育企画管理部長
2012年10月 東邦大学医療センター大森病院臨床教授
2019年7月 東邦大学医学部附属東邦大学保育園園長（～2021年6月）
2020年4月 東京工業大学非常勤講師
現在に至る

専門分野

一般外科，消化器外科，総合診療，腹部救急

専門医・指導医

日本外科学会 認定医・専門医・指導医
日本消化器外科学会 認定医・専門医・指導医
日本消化器外科学会 消化器がん外科治療認定医
日本病院総合診療医学会 認定医
日本腹部救急医学会 腹部救急認定医・教育医

学会役員

日本ヘルニア学会 理事・評議員
日本臨床外科学会 評議員
日本病院総合診療医学会 評議員
日本腹部救急医学会 評議員・特別会員
東京ヘルニアアカデミー副代表

主催学会

第19回日本ヘルニア学会学術集会（2021年5月）

臨床医としての原点回帰—心新たに目指す断らない医療—

島田 長人

東邦大学医療センター大森病院 教育企画管理部
東邦大学医療センター大森病院 総合診療・急病センター（総合診療外科）

1982年に東邦大学医学部を卒業し、当時の外科学第2講座にお世話になり、外科医としての道がスタートしました。第2外科では、当時の教授である、継行男先生、故竹内節夫先生をはじめ、本当に多くの諸先輩の先生方にご指導いただきました。研究分野では、継先生率いる「平滑筋班」に所属させていただき、消化管運動機能に関する研究で学位を頂きました。

当時の第2外科は、消化器疾患のみならず乳腺や甲状腺、末梢血管外科など幅広い診療や手術を行っていました。しかし、徐々に専門性が問われる時代となり、臓器別の狭く深い診療が要求されるようになりました。大学病院の使命としては当然のことですが、私個人としては狭い領域の診療だけではなく、もっと幅広い症候学を勉強したいという気持ちが次第に芽生えてきました。

2003年に、診療科再編成に伴う、いわゆるナンバー内科・外科が廃止され、同時に総合診療・急病センターが発足しました。一般的に、総合診療科は内科医が主体ですが、大森病院では外科医も参加してほしいという当時の執行部からの強い要望がありました。外科医が総合診療にどう関われば良いのか全く未知数でしたが、症候学を学びたい気持ちがどうしても捨てきれず、杉本元信教授率いる総合診療・急病科学講座（当時の講座名）に2004年2月に移籍させていただきました。

時を同じくして、2004年4月から、新臨床研修制度が開始されました。当時の厚生労働省の示す研修項目の中で、外科系疾患は、胃癌や大腸癌などの手術経験ではなく、一般外科領域および腹部救急疾患などの救急領域の研修に重きを置かれていました。たまたまこの新しい研修制度のプログラム作成に関わっていたこともあり、総合診療科の内科だけではなく外科も初期研修医教育の受け皿として活動することになりました。

総合診療内科の先生方とは、医局も一緒ですので、カンファレンスなども一緒に参加させていただきました。外科医のみのカンファレンスとは異なり、内科の先生方から学

ぶことが非常に多く、私にとりましては非常に充実した楽しい時間を過ごさせていただきました。杉本先生からは、病院における総合診療とはどうあるべきかを学びました。—医療の原点は総合診療である。個々のスペシャリティーはあっても、患者さんの前では、常に肩書のないただの医師であること、それが総合診療科のモットーである—。2013年に杉本先生は退任されましたが、その言葉は、現院長の瓜田純久教授に連綿と引き継がれています。

私は医師として、瓜田先生の「どんな患者さんも診る、決してNo!とは言わない」という医療に対する姿勢に感銘を受けています。心の中でいつも「断らない」を自分に言い聞かせながら診療していますが、それを実行し継続することは極めて難しいことです。ましてや外科医である私にとって、様々な症候に対応することは不可能です。患者さんからみると、目の前の医師は、外科医であろうと内科医であろうと何ら関係なく、一人の医師です。患者さんは、様々な痛みや苦痛を抱え、病院を訪れます。その身体的精神的な辛さを少しでも軽くしてあげられる医療を、今こころ新たに、目指していきたいと考えています。

今日までご指導いただいた多くの諸先輩の先生方、そしていつも支えていただいた同僚や後輩の皆様方に心から感謝申し上げます。同時に、毎年入職される初期研修医の先生方には、多くのことを学ばせてもらいました。ついこの間ローテートしていた研修医が、ふと気付くと立派な講師として活躍しています。本当に頼もしい限りです。また教育企画管理部長として、院内の様々な部署の皆様方にご協力をいただきました。なかでも事務部の皆様方には本当ににお世話になりました。事務部のご協力無くして、教育企画管理部の仕事は成り立ちませんでした。本当にありがとうございました。皆様方のご協力に感謝を捧げ、退任の挨拶とさせていただきます。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2022-035